

「自分でつかむ」という学習姿勢をはぐくむ講義展開 —分娩における援助技術獲得の過程における試み(第1報)—

濱田 伸子, 山下 美穂

要 旨

援助技術とは、ただ手順の総合体ではなく、対象への理解に基づいた働きかけでなければならない。また、技術とは実施者の成長に応じて熟達、変化しなければ技術とは言えないという側面を持っている。しかし、近年若者の学習や自己の役割の自覚に関する変化の中で、学生の主体性や積極性の不足が問題とされる事が多い。本学において助産学を受講する学生の姿勢にも、同様の問題を感じ、学習効果を得るだけでなく、援助者としての成長を促すきっかけとなることを期待して、「助産技術学Ⅰ」において平成16年度より新たな講義展開を試みた。「助産技術学Ⅰ」は分娩における援助技術を学習する科目であり、これまで教員の講義・演習を中心とした科目であったが、新たな講義計画では、ビデオや資料を手がかりに、グループによる自己学習を中心に、教員はその理解の確認と修正を行ないながら、学生の気づきを促し、学生各々の変化やグループの形成過程を見守る方法をとった。

結果として、誤った理解や学習不足の学生は見られず、技術修得の状況も良好であった。また、何よりも大きな変化は、学生の学習姿勢に積極性が見られるようになった点であった。その変化が、我々が意図した人間的な成長に繋がるのかは、まだ評価の段階では無いと思うが、学生は「自分でつかむ」という姿勢の一端は体験できたように思う。ここに、新たな講義展開の状況と、学生の変化を報告し、今後の課題を明らかにしたい。

キーワード：助産学生、助産技術演習、学習態度、学習過程、技術習得

1. はじめに

「援助技術」は、たんなる手順の総合体ではない。例えば、分娩介助における手順とは、分娩進行による身体の変化の具体的理解に基づいた骨組みの1つに過ぎない。その骨組みに、対象そのものやその状況に関する理解や配慮に基づいた肉づけがされなければ、「分娩における援助技術」とは言えない。

また、「技術」とは一旦獲得すればそれで良いというものではなく、実施者の成長に応じて熟達、変化することが無ければ、「技術」とは言えないという側面も持っている。だからこそ「援助技術」を獲得するためには、学習する側の、積極的、主体的な取り組みが必須であろう。

しかし、現状において学生の中には、「専門的技術を学習する姿勢」なのかと考え込みたくなる態度で学習に臨み、マニュアルに添っ

た動作としてしか「援助技術」をとらえられない者も少なくなく、最近では主体的学習態度や学生の判断力を高める学習方法として、小グループ学習などの取り組みと、その成果が報告がされている¹⁾²⁾。

このような現状の中、「行動に重要な影響を与える唯一の学習は、自分で見出し、自分で自分のものにした学習である」というカール・ロジャーズの教育観³⁾や、教えない教育を実践していた賀茂川中学校の記録⁴⁾⁵⁾を手がかりに、助産に関する専門教育科目である「助産技術学Ⅰ」の学習をとおして「自分でつかむ」ということを学生自身が考え、体験できるよう、講義展開の検討、変更を行った。ここに、平成16年度からの2年間の実施内容を振り返りをし、その報告を行う。

2. 「助産技術学Ⅰ」とは

「助産技術学Ⅰ」は、4年次に選択できる助産に関する専門教育科目の一つであり、2単位、60時間の演習科目である。学習目的は、分娩における母児の観察技術、分娩が正常に経過するための援助技術、産婦との信頼関係を構築する技術などの基本的技術を学習し、修得することである。

3. 「助産技術学Ⅰ」変更前の講義展開と課題

教科書を中心に、教員が必要物品、注意事項、手順などを講義し実施後、学生が実施する、通常行われている学習であった。

この時の学生の課題として、以下のような問題が見られた。

- 1) 教員の説明中、隣の学生と話している等して、教員の説明をきちんと聞いていないなどの学習態度。
- 2) 4年次生になるまでに当然修得している

であろう清潔野の理解、導尿や鉗子操作など清潔操作の基本的知識の欠如。

3) 指示されたことは忠実に行うが、あくまでも受け身であり、演習や講義時間以外の自己学習も、一連の技術を修得するという緊張感や集中力の不足。

4. 「助産技術学Ⅰ」変更後の講義展開

1) 講義展開変更によって期待される学生の変化

(1) 分娩介助を構成している技術への理解や、技術獲得が効果的に行えるようになる。

(2) 講義・演習・自己学習の過程の中で以下の2点を体験しながら、学ぶ時に必要な姿勢や、学習過程に関連した気づきが深まる。

① 問題意識をもって講義に参加し、上記(1)に関して、積極的、主体的な取り組みができるようになる。

② 学習の過程において自分の意志や考えを持ち、表現することの重要性を理解し、表現する場としてのグループ間の人間関係に気づくことができる。

2) 講義展開の実際

(1) 導入1

「助産技術学Ⅰ」の学習目的と、技術、援助技術の持つ特徴を確認しながら技術を「自分でつかんで」学ぶ動機づけを行う。

「助産技術学Ⅰ」の学習目的の確認を行った後、技術に関連した講義を行う。その後、分娩介助のイメージ作りのために、実際の分娩場面をビデオテープで視聴する。

次に、分娩介助技術学習の資料として、既卒生の助産技術・診断総合試験において撮影したビデオを各々に貸与し、くりかえし視聴できるようにした。この際、撮影されている事例の分娩進行に関する情報は提供せず、学

生自身が援助内容の意味や根拠を考察することを指導した。

なお、このビデオは教材として使用する旨、既卒生より了解のあった物を使用した。

また、自己学習のガイドラインとして、実際に助産学分娩介助実習で使用している分娩介助技術評価表(資料①)をサブテキストとして提供する。この評価表は、基本的な分娩介助の手順や実施上の留意点が理解できるように構成されている。

技術学習に必須である必要器具については、分娩介助に際し、一般的に使用されると思われる器械類、衛生材料、リネン類等を助産学実習室に準備し、学生が自由にセッティングできるようにする。この際、機械類の中に正常分娩介助以外で使用する頸管把持鉗子、子宮ゾンデ等の産婦人科用器械も一緒に配置し、学生自身が必要な機械を判別しながら、それ以外の器具への関心を持つきっかけとなるよう配慮した。

(2)自己学習Ⅰ(個人作業・グループワーク)

分娩介助の大筋の手順をつかむことを目標に、実際の分娩場面のビデオ、既卒生の試験ビデオ、教科書、分娩介助技術評価表を利用して、学生のみで、分娩介助の手順を組み立てる。教員はなるべく指示やアドバイスを行わず、学習の過程で明らかになった問題を確認するにとどめ、新しい人間関係を構築しつつ、手探りで学習を開始している学生の不安や戸惑いの有無に注目しながら、学生の反応やグループダイナミクスの形成過程を見守る。

(3)導入2

導入1で行った、講義展開のオリエンテーション、実習室の使用法・使用上の注意等の説明に関する学生の疑問に答えながら補足説明を行う。

その後、教員が1事例を設定した分娩介助のデモンストレーションを行ない、自己学習を通して学生がイメージできた手順と、イメージしきれない手順の確認を行なう。この時、学生が自分の学びたい視線で学べるように、必要物品の準備から分娩台周辺のセッティング、対象への声かけなど一つ一つゆっくりと丁寧に行ない、その後、学生の質問を受ける。

この時に、これまでの自己学習の中で学生が組み立てた分娩介助の手順に、大きな間違いがないか確認、修正を行う。

(4)自己学習2

導入2での見学や説明に留意しながら、再度技術の組み立てを行なう。自己学習1では、分娩介助の大筋の手順をつかむことを目標としていたが、この時間では、清潔操作や導尿などの一つ一つの技術に関して、それらの基本動作をできるだけ細かくつかんでいくことを目標とする。

疑問や、イメージがつかめなかった点はその都度記録しておき、次の展開である講義で問題解決するよう指導する。

教員は、今後のグループ形成、学習意欲に影響することを考慮し、この段階で学生の間関係、各学生の傾向や弱点などをできるだけ把握する。

(5)自己学習2までの成果発表

学習成果の確認のため、それまでに学生が組み立てた分娩介助の手順に従って実施してもらおう。分娩介助の手順に対する大きな理解のズレがないか、再度確認、修正を行なうと共に、学生が自分達で何かをつかめつつあるという手応えに繋がられるよう肯定的な働きかけを行なう。

(6)分娩介助の講義(反復練習)

援助技術一つ一つの手順とその根拠、援助

実施場面における安全・安楽を保持するための留意点を教員の演習を交えて講義する。これまでの自己学習を通して明らかになった疑問への解説を中心に、学生の理解の根拠を確認しながら、状況に応じて変化する援助技術に対する理解に誤りがないか確認して行く。助産技術は助産診断と一対であり、助産診断学Ⅰの学生の理解が本講義に影響するため担当教員と進行状態を確認しあう。

学生は講義時間以外に、反復して練習を行なう。最終的な助産技術・診断総合演習試験前には、それまで学習してきた助産技術・診断の知識をもとに、呼吸法や努責の誘導などの産婦にたいする声かけ等、実際の援助場面を想定した練習を行なう。この時期になると、他の助産学の講義も進み、各学生の疲労もピークをむかえるので、表情や顔色に注意すると共に、グループ間の取り組みに差が表れたり、グループ内の人間関係が学習姿勢に影響をおよぼすこともあるため、適宜調整を行なう。

(7)助産技術・診断総合演習試験

助産診断に基づく助産技術の習得度を評価する。また、この試験を助産学分娩介助実習における分娩介助場面で予想される緊張やストレスの疑似的な体験の場とする。

また、学生相互に評価をしあう体験を通して、自分の考えを表現しつつ、相手を尊重する体験や、教員やグループメンバーの評価内容から今後の自己の課題を得ることを期待する。

以下に試験方法の詳細について記す。

①事例の配布

試験実施日の1週間前に、助産過程が比較的展開しやすいと思われるそれぞれ異なった事例を提示する。この際提供される情報量は助産展開の方向性を決める最少限度とし、

提示してある以外の分娩進行や、産婦の反応など、分娩第1期の援助内容を左右する情報は学生が自由に作成するようにする。産婦の経過や具体的な援助内容を学生がどのように想定するかによって、学生の理解の程度を知ることができる。また、各人の想像力や表現力を発揮する機会にもなることを期待する。

試験で実際に使用した事例は以下のようなものである。

(事例1) 30才の1回経産婦、身長158cm、体重66kg(非妊時:59kg)、妊娠週数38週3日、EFBW2880g、(BPD9.4cm)

現在までの所見:破水があり入院。1時間に2~3回程度の腹部の張りがある。児心音reactive。その後、2時間程度で8分間欠、30秒持続する陣痛発作。現在、入院から6時間経過、陣痛2分間欠、50秒持続。子宮口開大は8cm、展退80%で、陣痛発作時に、羊水の流出が少量ずつ見られる。

②資料の作成

学生は試験当日までに、提示された事例の情報をもとに展開した助産過程を分娩経過表(パルトグラム)、助産過程記録用紙に記載し、資料として担当教員に提出する。

③事例の選択および試験進行について

直接介助、間接介助、産婦役の3名で演習試験を受ける。この時、他の学生1名が評価者、1名はビデオ撮影担当を行なう。評価対象者は主に直接介助の学生であるが、間接介助、産婦役も評価をうける。事例の選択、役割の担当順や当日の進行担当は、必ず全員が体験するよう学生間で決定する。1回約1時間程度の演習試験とする。

④試験の実施

直接介助の学生は、資料の助産過程用紙を用いて、自分が行なう援助の留意点や根拠を必要時口頭で説明しながら、間接介助、産婦役の学生と演習試験を受ける。この時、直接介助の学生の言葉の音量、明確さも評価する。教員や他の学生の評価を受けるという状況は、当人にとってかなりの緊張を強いられるが、学生が実際の分娩介助において、緊張のあまり声が出ないということがある。このことは産婦の努責、呼吸の誘導に支障をきたし、分娩経過にも影響を及ぼすことになる。一見、援助技術と無関係に見える声量、言葉の明確さが、実際に学生が体験する場面を想定した評価項目であることを理解させる必要がある。

⑤評価

個々の学生の自己、他者評価により、これまで学習してきた助産技術・診断に関する習得度を評価する。

また、学習への姿勢や、自分の考えを深め、表現することができていたかについても評価を行なう。学生が学習過程で気付いたことや、学習の達成感が、今後展開される助産学分娩介助実習に生かされ、維持できるように強化する。

ここで学生が、そこに至る取り組みこそが学習過程であり、自分でつかむという事であると、自覚することが難しい。よって、教員は気づきを促すような評価を行なう。

5. 結 果

1) 「分娩介助を構成している技術への理解や、技術獲得が効果的に行なえるようになる」に関して

最も懸念したことは、正確な技術の修得に支障をきたすのではないかという点であった

が、「助産技術学Ⅰ」の学習目的である、分娩における母児の観察技術、分娩が正常に経過するための援助技術、産婦との信頼関係を構築する技術などの基本的技術の修得はできていた。また、間違った理解の基に技術を修得した学生はいなかった。

助産学分娩介助実習においては、実習施設のスタッフより、「基本的技術の修得状況が比較的良好」「実際使用する器械・設備を使った自主的練習が積極的」という評価を受けた。

2) 「講義・演習・自己学習の過程の中で以下の2点を体験しながら、学ぶ時に必要な姿勢や、学習過程に関連した気づきが深まる。」に関して

①問題意識をもって講義に参加し、上記1)に関して、積極的、主体的な取り組みができるようになる。

平成17年度の講義中、教員が記録として残した学生の状況をまとめると以下の通りであった。

前半：学生同士、目を合わせて何か言いたげであるが、発言は少ない。教員への質問は、ただ「どうして」「どうなっているんですか」という言葉を投げかけるのみ。

中盤：少しずつ整合性を確認しあい、「ここは先生に聞いてみよう」と、自分達の取り組みの過程で起こった疑問を表現できるようになった。教員への質問は「自分達はこう考えたんですけど、これはどうするんですか」という問いかけになった。

後半：演習時の立ち位置や、動きに確かさが見られる。グループ内の意見交換が自然に行われるようになった。教員への質問は、自分で行ないながら「これでいいですか」と、

より確実な方法を確認しようとする取り組みが見られる。

このように、講義への姿勢が、最も大きく変化した。学生からは毎回質問があがり、その解説に熱心に聞き入る姿が見られた。また、講義後の自己学習では、講義内容を互いに確認しあいながら理解を深め、また新たな疑問に気づくという展開が起こり、教員への質問の内容も、一つのことを理解した結果によって起こった疑問であり、自分達の仮説を基にした質問であることが伺えた。

3) 「学習の過程において自分の意志や考えを持ち、表現することの重要性を理解し、表現する場としてのグループ間の人間関係に気づくことができる。」に関して

当初はグループ学習自体が、これまでの3年間で形成された人間関係に影響を受けていると思われることが多かった。講義や演習において、疑問や仮説を述べあう場面が見られたが、他の学生の間違いや気になる点を指摘しあう姿は少なく、また、せっかく伝えようとしたことが、十分な効果を得られず、かえってグループの人間関係に齟齬をきたすということもあった。しかし、時間の経過と共に、援助技術の修得、その後の実習に向けて目標が共有され、グループ内の率直な人間関係の重要さに気がついていく学生が殆どであった。

4) 全体として

学習への姿勢や、学習の方法への気づきは、個人差は見られたが、深まる傾向が見られた。他学生の学習姿勢に触発され、自己のあり方について深く考えるきっかけとなったり、また、他学生への配慮が自然に行える等の人間

関係の深まりがみられた。以上のことから、今回の講義展開の変更によって、学生に望ましい変化を得る事ができた。

6. 「助産技術学Ⅰ」講義展開における今回の試みの限界

今回の変更における最大のポイントは『始めから教えない』である。つまり学生が技術を手順としてつかむ体験が先にあり、教員による講義は、教えるというより、構築するための材料の質を上げていくような講義展開を心掛け、学生自身に技術の構築を任せるという事である。しかし、このような講義展開が可能であったのは、本学の教育環境上、「助産技術学Ⅰ」を受講する学生数が少数である点に負うところが大きい。講義展開の実際にも述べたように、一つ一つの学習展開にそって、学生の反応やグループの状況などに対する十分な見守りや、配慮が必要である。そのため多くの学生を対象にする科目で同じように『始めから教えない』講義展開の実施には困難が予想される。

また、学生の理解の程度を把握しやすい技術修得科目であることが、もう一つの要因である。科目によっては、自己学習における学生の受け止め方を確認することが難しく、学習不足や、間違った理解が未修正のまま終わる学生が生じる可能性があり、そのような学科目においては不適切であると思われる。

7. 「助産技術学Ⅰ」講義展開に関する今後の課題

現代の青年の特徴として、古典的モラトリウムから質的变化が起き、①半人前から全能感へ、②修業感覚から遊び感覚へ、③自立への渴望から無意欲・しらけへと変化している

分娩介助実習評価表

資料①

項 目	細 目	自己評価	指導者評価	
1. 分娩第Ⅰ期 a. 入院時	1) 対象の状況を考慮して問診できる。			
	2) 診査・情報より診断できる。			
	3) 診断に基づいて処置できる。			
	4) 対象の状況に応じた声かけができる。			
	b. 陣痛室	1) 陣痛室の環境を整えることができる。		
		2) 陣痛の変化を見ることができる。		
		3) 内診により、ビショップスコアの変化を観察することができる。		
		4) 児心音の観察ができる。		
		5) 情報から、診断ができる。		
		6) 産痛の緩和と状況に応じた声かけができる。		
		7) 分娩進行を促す働きかけができる。		
c. 分娩室の準備	1) 分娩室の環境を整える。(プライバシー、室温)			
	2) 器械器具、物品、薬品が揃っている。			
	3) 分娩セットを清潔に保持することができる。			
	4) 分娩台、照明、吸引、酸素の準備ができています。			
d. 介助者の準備	1) 手指消毒の時期は、適切である。			
	2) 手指消毒が正しくできる。			
	3) ガウンテクニックが正しくできる。			
e. 産婦の準備	1) 分娩室への転室を、分娩経過から見て適切に、介助者の準備を考慮して行なえる。			
	2) 産婦が、より安楽で、効果的に努責がかけられるような体位の工夫ができる。			
	3) 外陰部消毒時、液の温度確認と、産婦への声かけができる。			
	4) 外陰部消毒を、正しい順序で清潔に行なえる。			
	5) 清潔な操作で、清潔野を作ることができる。			
	6) 清潔な操作で、介助器具を整えることができる。			
	7) 清潔野を作成するとき、産婦の観察を行ない、呼吸法などの声かけができる。			
	8) 内診により、ビショップスコアの変化を観察することができる。			
	9) 導尿の必要性が理解できる。			
	10) 導尿を実施する機器がわかる。			
	11) 清潔な操作で導尿できる。			
2. 分娩第Ⅱ期 a. 進行状態の観察	1) 会陰の状態を観察できる。			
	2) 内診により子宮口の状態、児の回旋、下降状態を知ることができる。			
	3) 産婦の状態、陣痛の状態を把握することができる。			
b. 胎児の状態観察	1) 児心音の観察、児心音の陣痛時その前後の変化を観察することができる。			
	2) 徐脈(早発、遅発、変動)がわかる。			
	3) 一連の処置を行ないながら、胎児心拍モニターの管理、観察ができる。			
c. 人口破膜	1) 人口破膜の時期がわかる。			
	2) 努責の誘導、コッヘルの使い方、先進部の保護ガーゼによる羊水の散乱防止等の手技ができる。			
	3) 破膜後に、心音の確認ができる。			
	4) 羊水の量、色、性状の観察ができる。			
	5) 破膜後の内診ができる。			

と言われて久しい⁶⁾。言い替えば、自分の未熟さに関する正しい認識が薄く、役割の自覚や責任が育ちきっていない青年が増えているとも言える。

一方、看護とは他者との人間関係の中に存在するものであり、その学習において知識を得るという学習は、看護教育の一端に過ぎず、看護者の学習には、その当事者の人間的な成長が伴わなければ充分とは言えない。自分が解っていないことが解らないという状態から、解っていない事に気づき、その答えを求めるという事が、学習の基本姿勢であり、主体的に学ぶという事であろうと思う。この気づくという体験が人間的成長と大きく関連しあっている、そのような仮説を基に実施した試みであった。

結果は上記のとおりであったが、このような講義展開が、学生各々にどのような変化をもたらしたかに関する評価までに到っていない。今後は、学生の具体的な変化、例えば、教員のデモンストレーションをどのような視点で見学したのか、その時、どのような疑問を抱いたのかなどに関する、具体的変化を評価していく手段を検討していきたい。その評価を教員と学生で共有しあい、確認しあうことをとおして、新たな学習へとつながるような評価にしたいと思う。

また、異なる能力や個性を持つ学生が、学ぶ上で必要な様々な過程や要件に気づき、主体的に学習するためには、そこに関わる教員自身の学生一人一人に対する肯定的な理解が重要であり、教員自身の人間観、教育観の深まりが必要であろう。自分で見出し、自分で自分のものにするという学習姿勢を学生に求めるのであれば、場を共にする教員も、学生との関わりを通して学び続けて行くという姿

勢が必要であることは言うまでもないことである。

8. まとめ

講義終了後の助産学実習では、対象との関わりにおける援助者としての自分を真摯に見つめ、課題を見出し、卒業研究としてまとめた学生も多い。そのような取り組みこそ、冒頭で述べた、自分で見出し自分で自分のものにした学習であると言って良いのでは無いただろうか。このように、与えられる知識をただ受け止めるのではなく、自分の体験の中から、学生自身が学んでいけるような動機づけとなるよう、今後も講義のあり方について考え、取り組んでいきたいと思う。

9. 謝 辞

「助産技術学Ⅰ」の新たな講義展開において、学生1人1人の状況に目を配り、支援して下さった渡邊ミチ子教授、牛ノ濱幸代講師、協力して頂いた学生の皆様に感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 大平光子 他：主体的学習態度をはぐくむ教育方法－助産学演習における少人数グループワークの試み－，大阪府立看護大学紀要 Vol.11, No.1, 23-29, 2005
- 2) 佐藤直美 他：助産課程における診断能力を育む教授方法の試み－小グループによる事例学習を用いて－，聖路加看護大学紀要, No.24, 60-65, 1998
- 3) 友田不二男編：ロジャーズ全集22，創造への教育，200，1972，岩崎学術出版
- 4) 花は自分でひらく－信川実先生の教育実践記録－，1979，日本カウンセリングセンター

- 5) 信川 実：賀茂川中学校の教育と私の教育観，1987，日本カウンセリングセンター
- 6) 小比木啓吾：モラトリアム人間の時代，中公文庫，1981
- 7) 本田英子：看護学生の自己教育力に影響する因子－学習方法の視点から－，第27回看護教育，1996
- 8) 坪田和美：看護基礎教育における自己教育力－実態調査からの考察－，看護教育44／3，2003
- 9) 堀喜久子，小野敏子編：わかる授業をつくる看護教育技法1，講義法，1999，医学書院
- 10) 宇佐美寛，米田和美：看護教育の発想－授業をどう変えるか－，2003，看護科学社
- 11) 青木康子：助産学体系7 助産診断・技術学I，2004，日本看護協会出版会
- 12) 小林秀雄：考えるヒント2「考えるということ」，1975，文春文庫

Development of a teaching plan to promote
a 'self-grasping' learning attitude

—an attempt in the process of acquisition of delivery-assisting techniques—

Nobuko Hamada, Miho Yamashita

Faculty of Nursing and Nutrition of Kagoshima Immaculate Heart University

Key Words : midwifery student, exercise for delivery-assisting techniques,
learning attitude, learning process, learning of techniques

Abstract

The assisting technique should not be a simple combination of procedures but should be an activity based on understanding of objects. In addition, the technique has an aspect that it cannot be called a technique unless a performer of a technique reaches proficiency and the technique changes with his or her growth. Consciousness of young people about learning in schools and their own role in the society is recently changing, and as a result, lack of independence and active inquiring of students frequently becomes a subject of discussion. We found the identical problem in students learning midwifery in our university as well.

Since April 2004, we consequently attempted to develop a new teaching plan in the lesson "conduct of labor I" expecting not only to obtain a high teaching effect but also to give an impetus to the students so that they would become persons eager to assist human.

In our new education plan, students learned the lesson by themselves mainly through group studies using videotapes or available data as introductory tools. Teachers remained to help students by pointing out information and points of view that were unnoticed by them, and watched changes in individual students and in the process of group formation, while ascertaining and correcting what understood by the students.
